



# 世界の話

---

---

sari-sari

---

ここは雲の上。さびしさの果て。空の青と風のトウメイが混ざりあう場所。色んな惑星中の使い古されたガラクタ、言葉、気持ちが最後にはみんなここに行きつくんだとか。

そんなヘンテコなところだから、ここに暮らしてる人たちだってそうとうなもの。

人の代わりに、動物園でお払い箱になったライオンを警備員として雇っている警備会社の社長さん（この会社に再就職して、ライオンたちがまず一番最初に覚えさせられるのが、二足歩行。社長がケチで、四足歩行動物用の制服を作らないから、人間用のものが着られるように。）

自分がこれまでに集めたさまざまな惑星のビーズでいつかニセモノの星を作って、夜空にこっそりとぶら下げておいてやろうとたくらんでいる女の子（ちなみに、女の子のお兄ちゃんは七色のバームクーヘンを焼いて、虹のかわりに空に貼りつけようとしたことがある。でも、焼きあがったバームクーヘンがあまりにもおいしそうで、結局全部食べてしまい計画は未すいに終わった。）

大昔に百科事典で見た、惑星CKUのNHNという国で食べられているという、あんぱん、なるものをぜひ一度食べてみたいと願うおじいさん（何十年も前からサンタクロースへの、おじいさんの願い事はこれ。けど、届けられたためしはない。なんでかって、おじいさんは知らない。この地区担当のサンタが昔、おじいさんの恋敵だったってことを。一人の女性をめぐるって、かつて二人の若者が激しい恋の火花を散らし、おじいさんが勝利したのだ。サンタという職業についてのライバルは、その腹いせにおじいさんにだけプレゼントを配らない、というセセコマシイことをしている。）

そのおじいさんの妻で、かつて二人の男に争われた昔の美女（今や立派なおばあさん！）は、毎年クリスマスにサンタクロースから届くプレゼントに困っている。大きなダイヤの指輪、ミンクの毛皮、厚切りステーキ肉、とかいらぬものばかりサンタは置いていく。そのプレゼントたちに、毎年必ず添えられているのが、奇妙な詩（ハミガキ粉やシャケの漁獲量、ぶどうジュースに言及した挙句、最後はいつも、I LOVE YOUで終わっている）と、年齢と同じ本数のバラの花束（歳の数だけ送ってくるなんて、大きなお世話だ！）

なんだか気味が悪くて、おばあさんはこのことをだれにも相談できないでいる。おばあさんの願いはただ一つ。おじいさんが、あんぱんとやらを食べることができるよう、それだけなのだ。だから、おばあさんはサンタクロースには悪いと思いつつ、もらったプレゼントは毎年、質屋（あるいはお肉屋さん）へ持って行く。そうしてできたお金は、いつかおじいさんと二人で惑星CKUのNHNへ旅行するための資金として、こっそり貯金している。

他にも、捨てられたぬいぐるみたちを対象に塾を開いている美人のお姉さんとか、音の出ない楽器をコレクションする音痴なギャングのボスとか、人類はみんな仲良くできるはずだっていうのを、数学の証明で示そうと計算にはげむ言語学者とか、それはもうさまざま。

でも何が一番の、そうとう、ってここで生活する人たちは全員、自分がそうとうだってことに気づかず、毎日真げんに生きていることかもしれない。

おっと、なんだか前おきが長くなってしまったみたいだ。今日ご紹介するのは、そんな人たち

の中であってひととき目をひく二人組。ほらほら、声が聞こえてきた。

「ハカセ、どーしましょ。今年も、悲しい気持ちやらさみしい言葉やらが多すぎて、シヨンポリ成分過多の雪になりそうです。どうもここ数年、楽しいとかうれしいとかのニッコリ成分が不足しているなあ。ほかの惑星の住人たちは毎日そんなに、つらい心でいるんですかねえ。いくらぼくらの仕事が、使い古しの気持ちと言葉をリサイクルで雪に変えて、もとの惑星にかえすことだとしても、何だか申し訳ないなあ。もともと、その惑星から来たとはいえ、せっかく降らすのなら、ニッコリ成分たっぷりの雪のほうが……。なんだかぼくは腕が鳴らんですよ」

彼は早口にそう言うと、着ている白衣の右ポケットから一枚の食パンを取りだしをかじった。若い科学者は口をもぐもぐさせつつ、紺色のぼさぼさごわごわの自分の髪を引っかきまわしている。

ふおっふおっ、ハカセと呼ばれたおそろしく背の低い（プードル以上ゴールデンレトリバー未満）老人が、笑い声ともせきともつかない声を出した。ハカセはどてらと呼ばれる、惑星CKU・NHNの国民服（友人の科学者が、CKU人のふりをしてNHNで開かれた学会に参加したときのおみやげ。ハカセには知らせてないけど、赤ちゃん用）を着て、チョコレートを食べている。

ハカセは、のどかわいたなとつぶやくと、はげ頭の側面にえんとつのケムリをまとったような、自分のもじゃもじゃ白髪の中へ手をつっこんだ。その中からひび割れた試験管を二つ取り出す。ハカセ専用踏み台を使ってかたわらの机にのぼると、ポットからその試験管にコーヒーをそそいだ。

まあまあ、ジョシュくん落ち着いて、ハカセは机の上から若者に試験管をさし出す。

「右手に持っている食パン、食べないのならしまっておいたらどうだね」

ハカセの言葉にジョシュくんはあわてて、パンを右ポケットへつめ込む。次に取り出すときは、パンがロールケーキになっているかもしれないな、とハカセは思った。

「ふおっふおっふおっ、案ずるでない、ジョシュくん。ニッコリ成分が少ないということは、どの星でもニッコリ成分が使い捨てられていないということだよ。それぞれの惑星では毎日、はいて捨てるほどのシヨンポリ成分が生まれるだろう？ その分、よろこびが現れたときは、みんなそれを一つ一つ噛みしめて、だいじにしているんだ。そう簡たんには手ばなさないよ」

とハカセ。試験管を口に運び、うむとひとりごちた。コーヒーの湯気で、ただでさえくもっている博士のひび割れ丸メガネがさらにくもる。

「そういうものですかねえ」

とジョシュくん。試験管を口に運び、うへえ、しょっぱい！ と舌をだした。普段から、たれ下がっているジョシュくんの眉毛が、さらに下を向く。

「さ、さ、ジョシュくん。みんなを呼んできてくれ。今年も、ユキフラシを始めようじゃないか」

「ハカセ、おつれしました。お二人ともどうぞ入ってください」

ジョシュクんにうながされ部屋に最初に足を踏み入れたのは、わっか。めがねをかけ、しゃんと背筋を伸ばしたうすいわっかは、机の上にハカセを見つけると、

「はじめまして。このあいだまで、土星のわっかをしておりました、ワタクシ、わっかと申します。ええ、少し前に、新人へ後釜をゆずりまして、今はしががないただのわっかでございます」

「てやんでえ」

わっかの後ろから顔をのぞかせたのは、タイムマシン。マシンは手足をバタバタさせ、わっかがしゃべっているのも構わず、がなりたてた。

「オレが金星に初めて登場したときは、ちやほやしたくせに。今じゃ、ハイブリッドタイムマシンがいい、やっぱり金星に優しいマシンじゃなきゃ、なんて言いやがって。今じゃオレを見向きもしない」

ああ違う星に生まれたかった！ マシンは叫ぶと、トランクから酒ビン（石油のウォッカ割り）を取りだしいきにあおった。マシンの横で、ジョシュクンが怯えて泣き出しそうな顔をしている。彼は涙をこらえようと、右ポケットの中の食パンをぎゅっとにぎりしめた。

顔色一つ変えずに博士が話しだす。

「ふおっふおっ、お二人ともよく来て下さった。実はお二人に雪を降らすのを、手伝っていただきたく、今日はお呼びしました。雪をご存じかな？ あれは毎年、われわれがここから、わしの発明したこの機械で降らせているのです。いやはや、毎年各惑星に降らす雪はばく大な量でしてな。ジョシュクンとわしの二人ではとうてい、間に合わない。そこで毎年、それぞれの惑星からこれぞというのを選んで、手伝ってもらっているのですよ。なあと、仕事自体は難しくありません。そこの巨大フラスコに入っているシオンポリ成分と、あっちの小さなビーカーのニッコリ成分をこの筒の中に流し込み」

「てやんでえ、うそつくんじゃねえやい。ここはガラクタがたどり着くところなんだろ？ 最初のうちたくさんいたガラクタたちだって、ここに住んでる人にどんどんもらわれていって、最後に残ったのがオレとわっかのおっさんじゃねえか。要するにオレらはガラクタ中のガラクタってことなんだよ。えりすぐりの、なんて見えすいた世辞いいやがって」

「あ、あなたねえ、」

これまでだまっていた、わっかが口を開いた。わっかは温厚な性格で、怒るのは百年ぶり。もちろん最初の、あ、あなたねえ、の声はうわずった。

「そりゃ、ワタクシたちはガラクタかもしれませんよ。でもね、ハカセさんとジョシュさんが気をつかって、そんなわれわれに声をかけてくれたんじゃないやありませんか。どうして素直に喜べないんです？」

うるせえやい、マシンはそう言うが早いか、わっかに殴りかかろうとした。わっかは間一髪でよけたものの、そこからわっかとマシンのけんかが始まった。

どすん、がちゃん、「二人ともやめんか！ あ、そっちには雪を降らすための大切なスイッ

チが」、ぽち、ぴこ、ごごごごご、「ひい、二人とも落ち着いてください。食パンあげますから！　ぎゃあ、シヨンポリ成分の入ったそのフラスコには手を触れないで！　ニッコリ成分入りのそのビーカーもダメ！」どろどろどろ、じょぼじょぼ、どすん、がちゃん、ぐいーん……

「ユキフラシ準備完了。ユキフラシマス。設定ガ変更サレタタメ、今年ノユキハ、一粒ノ温度四十三度。アッチッチ」

その日、銀河系すべての惑星で歴史上初となる熱い雪がふった。どの惑星も、驚きでみたされたという。次の年、博士たちのもとにはたくさんのビククリ成分が届いたため（ビククリ成分を雪に変える技術はまだ発明していない！）、困ったハカセたちは成分を蛇やワニに変えて、雪のかわりに降らせたってことはまた別の話。いつかの機会にゆっくりと。